

आयूस: あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館 / 京都府宇治市槇島町千足80

☐☐☐☐ モノをそまつにする人間は人間もそまつになるようになる ☐☐☐☐

京都文教短期大学図書館長

児童教育学科・教授(幼児教育学) 照屋敏勝

私がそのことを痛感するようになったのは、学生時代に牛乳配達をしていたからである。大学の3～4年の2年間、東京都練馬区の中村橋駅(西武池袋線)を中心としたエリアで牛乳配達をして生活していた。そのときに、家庭によって牛乳ピンの扱い方が異なることに気がついた。毎日きれいに洗ってかえす家庭もあれば、洗わないままかえす家庭もある。1週間分洗わないままごそとかえす家庭もある。牛乳ビンに対する対応はさまざまである。牛乳は腐りやすいので、夏場になると、ビンにナメクジが附着したり、極端な場合はウジがわいたりもする。

配達に出かけるのは午前4時である。午前3時に起床して間借りしているアパートから配達店まで自転車で行き、準備して4時頃から配達に出るのである。暗い中での配達である。各家庭はまだ起きていない。牛乳ビンがどうなっているかは分からない。牛乳箱に素手をつこんだときにヌルッとした不快感があれば洗っていないということである。明るくなってから配達する家もあるので、そういうところでは最初からはっきりしている。

牛乳びんはモノであるが、そのモノにそれを扱う人間の心が反映されるのである。したがって、ナメクジやウジは牛乳ビンから発生しているのではない。その牛乳ビンを持つ人間の心から発生しているのである。牛乳ピンは内視鏡のように暗い中でもその家庭の状況が如実に視えてくるモノである。

仏教は(ぶつぎょう)でもある。モノの(いのち)と(ところ)を教える宗教でもある。モノはものではない。いのちなのである。いのちと考えれば扱いても

違ってくる。モノをそまつにするということは、いのちをそまつにするということである。そのことを常に強調されているデザイナーがいる。僧籍を持つ世界的なインダストリアルデザイナーである栄久庵憲司氏である。『道具考』(鹿島研究所出版会)、『インダストリアル・デザイン』(日本放送出版協会)、『幕の内弁当の美学』(ごま書房)『道具の思想』(PHP研究所)、『仏壇と自動車』(佼成出版社)などの著者である。

1990年、京都で開かれた全国仏教保育大会で栄久庵氏は記念講演をされた。私もある分科会の助言者として参加したので、その講演を拝聴した。まさに発想を変える新しい独創的なモノ観であった。栄久庵氏は『道具考』の中で道具道の内容として次の4つを提案されている。

- 1つは、道具の心を探ること
- 2つは、道具の作法を探ること
- 3つは、道具の躰を探ること
- 4つは、道具の力を探ること

「道具」という言葉はもともと佛教語である。仏道修行に必要なさまざまなモノが道具である。道具は使い方によって修行や人格形成に対する貢献度がちがってくる。「作法」は使い方や動作方法のことであり、「躰」は使い方を見事さや使い方の制限であり、使い方のエチケットである。現代社会は「ケイタイ」の車内使用や放置自転車を見れば道具の使用がいかにかに不作法、不躰になっているかが解る。道具の受難時代である。道具は人間の生活を便利にし、人間の心を豊かにしているのであるから、道具四道をもっと大切にする必要がある。

(てるや としかつ)

❖❖❖ 世界人権宣言60周年と本学人権図書コーナーの開設について ❖❖❖

現代社会学科・教授(国際協力論) 島本 晴一郎

国連の世界人権宣言が採択されて60周年が経過した。世界人権宣言とは1948年12月、国連のイニシアティブにより採択された人権にかかる宣言文書のことである。これは、戦前から第二次大戦中にかけて見られた悲惨な人権侵害を二度と繰り返すことのないようにとの各国の強い反省に基づき、新たに平和で民主的、かつ人権が尊重される世界社会の実現を願って採択に至ったものである。

人権を守るという理念が全世界的に採択されたにもかかわらず、この60年の間には予想もつかぬような様々な人権問題が勃発した。たとえば、国家権力の横暴による民主的な運動への弾圧、民族粛清などの暴挙、並びに人種や宗教問題に端を発する差別の蔓延等が発生した。また、経済のグローバル化に伴う貧困層の窮状の深刻化と格差の拡大、経済効率主義に伴う弱きものの切り捨て等、すでに民主化が進んだ開かれた国々においても、その枚挙にいとまがない。その一方で、アパルトヘイトが撤廃され、性差に伴う社会参画機会の障害の克服が進みつつある。またITを利用した世界市民運動の連携と監視が数多くの国家権力の横暴を暴き非難し、人権にかかる世論の意識を高めてきたのも事実である。果たして、この60年の間にわれわれは進歩したのか退歩したのかは、意見の分かれるところだろう。しかし、明らかに言えることは、この間に政治経済的な東西対立のくびきが崩壊し、世界経済が一体化するにつれ自由で開かれた社会が現実となったことである。それに伴って政治権力よりも自由の根底となる個々の人間の尊重という問題意識が共通理念として徐々に広がりつつある点ではないか。

このように言わば、国の内外を問わず個々人の経済・社会・文化的権利を尊重するという人権意識が定着するためには、教育の果たす役割が不

可欠である。国連は93年の人権委員会における「ウィーン宣言」を経て、95年から2004年に至る10年を「人権教育のための国連10年」と冠した。これにより、各国に対して、それぞれの教育機関や職業研修、公的、非公的な学習の場において、人権教育を促進するため効果的な戦略を策定することを呼び掛けたのである。

このような流れの中において、われわれは世界人権宣言の60周年を迎えたわけであるが、この機を新たに、人権教育の在り方に一層の工夫を凝らすべきだろう。我々教育機関にとって必要となってきたのは、具体的な人権侵害の事例に則して、地についた人権のコンセプトとは何なのかを初等、中等、高等、大学、大学院のそれぞれのステージにおいて、自発的に若人が学べるような仕掛けであろう。また、世界の先進諸大学においては、そのような具体的な事例(ケーススタディ)に基づいた人権教育をカリキュラム化する動きがみられる。本学においてもカリキュラムのみならず、課外研修活動、意識調査や懸賞論文などを通じて学生の自発的な人権意識の啓発に積極的に力を入れてきたが、今後ともさらに強化をしていく必要があろう。今般、本学大学図書館において100冊に及ぶ内外の主な人権問題を扱った書物を収蔵した「人権図書コーナー」が開設されたが、これはその意味では小さくとも意義ある一歩である。このコーナーの活用により、内外多方面での人権問題への具体的アプローチを本学学生が自発的に学びとることができるのであれば、これは素晴らしいことである。これを嚆矢にさまざまな読者がこのコーナーを活用することで、弱者のために尽くし、そのための真実を求め、また自分を省みるきっかけとしていただくことを望みたい。

(しまもと せいいちろう)

私のすすめる3冊

児童教育学科・専任講師（小児保健） 落合利佳

『ガラパゴスの箱船』

カート・ヴォネガット作 浅倉久志訳／早川書房

『スローターハウス5』『チャンピオンたちの朝食』の作者による作品。時は1986年、ガラパゴス諸島に10名の男女が漂着し、彼らを残して人類が減んでしまう（人類が減ぶ理由はヴォネガットらしい荒唐無稽な理由で思わず絶句!）。ダーウインの進化論通りに、彼らを祖先として人類は進化をし続ける。さて、100万年後の新人類はどんな姿をしているか。世界恐慌、戦争など人間の愚行を痛烈に批判した作品。原爆被爆者の子孫が100万年後の人類の祖先となるところも面白い。巻頭に引用されているアンネ・フランクの文章が心に残る。

『青い城』

L.M.モンゴメリ作 谷口由美子訳／角川書店

ヴァランシーは29歳の平凡なオールドミス。おまけに原因不明の心臓発作持ちでもある。口うるさくて無神経な母親や一癖も二癖もある親戚付き合いに息詰る毎日を送っている。そんなある日、医師の元を訪れた彼女は余命1年の宣告を受ける。このまま何もせずに死んでいくのか。彼女のとったあっと驚く行動とは。美しいカナダの自然を背景に、29歳の女性が遅咲きの幸せをつかむまでのサクセス・ラブ・ストーリー。主人公の平凡でさえないオールドミスから魅力あふれる女性に変身していく過程は痛快で小気味よい。『赤毛のアン』と同作者。

『夜中に犬に起こった奇妙な事件』

マーク・ハットン作 小尾 美佐訳／早川書房

父親と二人暮らしの15歳のクリストファー少年は、真夜中に隣の家の犬が殺されているのを発見する。誰が犬を殺したのか。犯人捜しをする中で、次々に彼の両親や隣人たちの秘密が明らかにされていく。人の気持ちを感じ取れない高機能自閉症である主人公が書いた作文という形式で物語は進む。数字や細かい事実にこだわるといった自閉症の特性もよく捉えられている。主人公に理解できない両親の事情がなんともせつなく、彼を理解し深い愛情で養育している父親に対し同情せずにはいられない。簡潔な文体とイラストで原文でも読みやすい。

（おちあい りか）

*** ことばともの、彼方と此方のあいだに一椿昇展評 ***

文化人類学科・専任講師（文化人類学） 佐藤 知久

京都国立近代美術館で2009年3月に開かれた展覧会「椿昇 Gold/White/Black」は、人類学的にみても極めて興味深い展覧会だった。

作品について簡単に述べよう。作品は四室に分かれて展示されている。第1室には、南アフリカの坑夫たちを丹念に描いた巨大な画像が12体。第2室にはこれも巨大な露天掘り鉱山の写真と、世界各地の露天掘り鉱山の形状を小さな金属の塊に彫り込んだオブジェクト。第3室にはエルサレムの聖墳墓教会のドアを模した物体と、バングラデシュの犠牲祭を写した映像（何頭もの牛が喉をかき切られ犠牲に供される）。最後の部屋にはパレスチナとイスラエルを隔てる壁をモチーフにした大きなキャンバス画と、パレスチナで収集したジョークを手書きした紙片が展示されている。

作品の背景には作家の「旅」がある。椿氏が世界各地を旅した結果として何かが生まれる。旅＝フィールドワークの成果として作品が作られる点で、椿氏の仕事は人類学者のそれに似ている。

だが人類学者なら、事物の意味や苦悩する人びとの声をことばを尽くして述べるところで、芸術家椿氏は沈黙する。

人類学者は自身が経験したものごとを、フィールドを訪れることができない読者に説明しようとする。人類学者は多くのことばで語る。それとは対照的に椿氏は、あらゆる説明を排し、事物をその厳選され、研ぎ澄まされたイメージによって示そうとするのだ（展評ではこのことばの無さが不評のようだ）。

確かに人類学者ならこのような展示はしないだろう。事物をその文脈から切り離したり、他の文脈に属する事物と並べずに、人類学者は異文化の人や事物を政治的・社会的な〈文脈〉のなかに「正

しく」配置しようとするからである。しかし逆説的なことにこの展覧会は、こうした反人類学的手続きによって、そこで言及された人や事物の現在について、そして私たち自身の生のあり方について、人類学的展示に優るとも劣らない力強さで、思いをめぐらせ感じとろうとする状況をつくりだすことに成功しているのである。

さらに重要なのは、この展覧会が決して何か正しい現実＝「真実の表象」を提示しようとしているのでも（それは第4室のユーモアによって明らかである）、また作家が作品の中に自身の思想や解釈を埋め込み、それを鑑賞者に解説させようとしているのでもないということだ（それにしてはあまりに無言すぎる）。

この展覧会を準備する上で、山浦玄嗣氏の仕事に出会ったことが決定的だったと椿氏は述べていた。それは古代ギリシャ語で書かれた福音書を、東北地方の一方言、「自分」たちにわかることばへと翻訳した一人の医師の仕事である（『ケン語訳新約聖書』）。福音書の世界という彼方の文脈だけでなく、読む側たる此方の文脈に対しても誠実たろうとした（山浦氏の仕事は精密である）結果、私たちは古代キリスト教の世界でもない、また現在ここにあるのでもない、まさにこの翻訳において初めて拓かれた、圧倒的に新しいとともに親しみを感じる空間へと招かれていく。

椿氏の仕事はこうした作業を、現在の世界について試みたものであるといってもいい。

彼方と此方。フィールドでもホームでもない。両者と関わるからこそ拓ける新たな空間、そこそが現在何かを考え、人びとと語りあうのに適した場所であることを、この展覧会は示している。

（さとう ともひさ）

私は本を読んだり眺めたりするのが大好きである。まさに乱読状態、時には積読状態のものもあるが、地元の図書館にも随分お世話になってきた。だがなぜ私は本が好きなのだろう。改めて考えると、私にとって本のページを開くということは、そこに私の知らない未知の世界が広がっているように感じているからだと思う。まるで未知の世界を冒険するような「ワクワク」「ドキドキ」感や「楽しさ」をわが子にも伝えたくて、幼いころから沢山の本を読み聞かせてきた。公立の図書館から、紙芝居や大型絵本を借りて利用したこともある。わが子は既に成長してしまったが、今でも図書館の読み聞かせボランティアメンバーとして細々と活動を続けている。忙しくてもこの活動を続けたいと思うのは、基本は自分が本を好きなこと、そして「読書」の喜びを次世代にも伝えたいと感じるからだと思う。

子どもの読書離れが伝えられる中で、「ブックスタート」プロジェクトにはとても関心を持っている。この活動は、親に絵本を読むよう義務付けるものではなく、「絵本」を通して、赤ちゃんと赤ちゃんの周りにいる人たちが、肌のぬくもりを感じ、言葉と心を通いあわすかけがえのない時間を提供したいという思いから始められたものである。乳児期におけるこのような経験は、世界に対する「基本的信頼感」の源になるとともに、後に絵本に親しめる基礎作りになるという。幼いころ本を読むのが自然な環境に育った子どもは、自らその世界を広げていく。

以前、学生に「人は何のために学ぶのか」という素朴な質問を投げかけたことがある。答えは様々だったが、その中で目を惹いたのは「学んで知識を得ることが結果として自分自身を知る手がかりになる」と指摘するものであった。自ら学ぶ手段としても「読書」は大きなウエイトを占めている。多様化する現代社会において、大人である私たちでさえ、時に自分自身のあるべき(ありがたい)姿を見失いそうになる。読書の目的と意義には、子どもたちに(大人も?)、「自分がどうい

人間として、どういう人生選択をして生きていくのか」自らの力で見つけるきっかけ作りも提供しているのではないだろうか。

また本にはさまざまなジャンルがあるが、例えば歴史ものなら、自分が今生きている世界を基点に、過去や未来について鳥瞰する貴重な機会を提供してくれるし、伝記の類は、個性的な生き方をした先人の様々な生き様を垣間見せてくれる。また絵本や物語で長く生き残ってきたものには、子どもだけでなく大人にも、何らかの教訓を伝えているような、独特の魅力を持っているものが多い。柳田邦夫氏は「絵本は人生に3度読むべきだ」と述べているが、多くの「絵本」が、それぞれの年代にとって意味を持ち、優れた文化や伝統を継承し、次世代へ繋ぐための役も果たしているといえるであろう。

最近、学級崩壊状態にあったクラスが「朝の読書」を通じて収まっていったという話を聞いた。また臨床現場でも「気になる子」といわれていた子どもが、学生ボランティアに絵本を読んでもらうことで落ち着きを取り戻していったという話も耳にする。人間味あふれる司書とのふれあいは、時にカウンセリングルーム以上に、ホッとする空間を提供するかもしれないし、独りで静かに読書にふける時間が、安らぎの時間と感じられる人も存在するかもしれない。

こうやって、改めてふりかえてみると、「図書館」そして「読書」には、まだ私たちの気づかない多くの力が隠されているように思える。本好きが高じて、数年前に司書教諭の資格を取得した。デジタル絵本も興味深いものを沢山提供しているが、「絵本の読み聞かせ」場面の母子間のやり取りを観察した某研究では、紙の絵本を媒介とする方が、母親の声かけや母子間の様々な相互交流が多かったという報告もある。個人的には「大人」への絵本のお勧めと、再度「紙」の本のページをめくる喜びを、次世代に伝えていきたいと思う今日このごろである。

(とりまる さちこ)

『かいじゅうたちのいるところ』を読んで

児童教育学科 幼児教育コース1回生 室田 まどか

1回生の長期課題であった「絵本ノート」を作成した私は、それをきっかけに多くの絵本と出会った。そして、その出会いを通して、絵本が単に子どものためだけのものではなく、大人にとっても大変興味深いものであることを知った。私は、「絵本ノート」の中で最も印象に残った一冊を、ここに取り上げてみようと思う。

その絵本は、モーリス・センダック作の『かいじゅうたちのいるところ』である。

まず、この物語のあらすじについて述べておこう。ある晩、主人公マックスは狼の着ぐるみを着て大暴れし、怒った母親に罰として夕食抜きで寝室に入れられてしまう。すると寝室に木が生え始め、あたりは木々が生い茂る森となる。そこへ今度は波が打ち寄せ、1年と1日航海したマックスは、やがて怪獣たちのいる所へと辿り着く。恐ろしい怪獣たちが現れるが、マックスは怪獣たちを従えて王様として君臨し、みんなで踊ったり騒いだりする。十分に楽しんだマックスだったが、急に寂しくなって優しい誰かのもとへ帰りたくなる。マックスは怪獣たちの王をやめ、また1年と1日航海して、母親に入れられた寝室に戻る。すると、そこには母親の作った温かいスープが置いてあったという物語である。

初めてこの絵本を読んだ時、私は、この物語は「マックスが眠りの中で見た夢」だと思った。しかし、母親の置いていったスープがまだ温かいうちに目覚めたというのに、マックスの寝室から見えていた三日月が、戻ってきた時には満月になっているのである。混乱した私は何度も読むうち、ようやくこれがマックスの「空想」の世界であることに気付いた。この絵本の挿絵は、ページが進むにつれて画面が大きくなり、絵がページ全体を占める部分に文字はない。そして、また徐々に絵が小さくなっていくのである。これはマックスの空想の世界の広がりを表わすものであり、「遊びに夢中の時には言葉はいらない」ということなのだろう。また、よく見ると、人間の足をした牛に似た怪獣が覗き込んで途中から仲間入りし、

マックスを肩車したり、同じ姿勢をとったりしている。多分、この怪獣はマックスの父親なのだ。マックスの空想の世界を壊さないようにそっと父親が忍び込み、一緒に遊んだのだろう。面白いことに、刺々しいマックスの表情も空想に浸るところから変化し始め、怪獣たちと遊ぶ所では本当に楽しげである。そして、その場面から三日月が満月になるのだ。おそらくこの月の変化は、時間の経過ではなくマックスの心のありようを示すものだと思う。大暴れを中断されたマックスの不満は、怪獣たちに君臨するという空想の世界を満喫することで消化され、充たされた。そして、本来の自分を取り戻せたからこそマックスは母親のいる家が恋しくなった。そう思ってマックスの部屋を見ると、帰宅した時の部屋の色が何となく暖かい色に変わったように思えるのは気のせいだろうか。

この絵本は一貫して子どもの視点で描かれていて、子どもへの教育的なメッセージ性は少ない。しかし、マックスの空想の世界に子どもたちは大いなる共感を覚えることだろう。何故ならば、子どもの生活のほとんどは大人の常識によって制約されていると思われるからである。マックスが帰って来るきっかけは、遠い世界からのおいしい匂いだったし、最後の場面に夕御飯が置いてあって「まだ、ほかほかとあたたかかった」のは、戻るべき温かい現実があるからこそ、子どもは安心して空想の世界を行き来できることの現れだろう。温かい現実性のない空想は、「逃避」に繋がる危険性を秘めている。そう思いながらこの絵本と向き合くと、大人が子どもの気持ちに寄り添い、良い信頼関係を築くことの大切さを感じずにはいられない。保育に関わる人だけでなく、いつか親となる全ての人に、是非読み込んでもらいたい絵本である。

(むろた まどか)

『かいじゅうたちのいるところ』

モーリス・センダック作
じんぐうてるお訳／富山房